

報告書：第 84 回日本生化学会大会における男女共同参画フォーラム

日時：平成 23 年 9 月 22 日 11:45-12:45

場所：国立京都国際会館 1 階 RoomC-1(第 4 会場)

参加者：約 100 名

テーマ：外国人から見たわが国の男女共同参画

主催：日本生化学会男女共同参画推進委員会（代表：有賀寛芳）

フォーラム概要：

日本の、とりわけ生化学等理系の大学などの研究機関においては、男女共同参画が欧米諸国と比較してかなり遅れていると長らく指摘されてきた。そのために、文部科学省などの男女共同参画プログラムなどを通じて改善努力がなされており、生化学会大会でもこうした取り組みを紹介してきた。今年度の男女共同参画ランチョンワークショップでは少し視点を変え、長く日本に滞在し活動している男女共同参画先進国の方 2 名に、わが国の男女共同参画や社会制度を見て感じたこと・特徴・長所・改善すべき点などを、自由に発言していただくこととした。参加者には国のシステムの違いや外国人から見た日本社会の問題点などを理解していただき、男女共同参画プログラムの今後の発展に寄与できたら幸いである。

プログラム：司会 小川温子（お茶水女大院）

11:45-11:55 有賀寛芳（北大・院薬）

タイトル：はじめに

11:56-12:20 Katarzyna Inoue（東京医科歯科大 院医歯学総合、ポーランド出身）

タイトル："Life is not only wine and roses"? - climbing up Japanese social ladder

12:21-12:45 Beatrix Fife（ノルウェー出身）

タイトル：Norwegian women in today's Europe : viking spirit and sex-free workplaces

概説

最初に有賀が、本フォーラムの趣旨を概説し、諸外国と比較した女性研究者数の割合等を概説した。

1 番手として、ポーランド出身・Katarzyna Inoue さんから、日本にきてからの研究者とし

での生活、苦勞等ポーランドの事情と比較してお話いただいた。彼女は留学生として渡日後、現在東京医科歯科大で助教として勤務されており、今回も日本生化学会会員として演題発表されている。今回の講演も日本語で発表された。

ポーランドは日本と比較して、女性研究者数ははるかに高く、またいわゆる PI の方が多い。ヨーロッパの研究室では通常英語を公用語として使っているが、日本の研究室は通常日本語である。日本語はヨーロッパ人にとってかなり特殊な言語であり、実験室での会話になじむまでの苦勞などがまず話された。助教となってからは、科研費等の研究費を申請しなくてはいけないが、日本の場合、基本的に日本語で申請しなくてはならず、これは日常会話以上に大変なことである。PI を目指すには研究費の獲得は必須であるので、これを克服することが大きなネックである事をお話いただいた。

次に、ノルウェー出身の Beatrix Fife さんからノルウェーと日本の違い、歴史などが紹介された。Fife さんは音楽家、画家として、また英語教師として東京で活躍されており、科学者ではない。ノルウェーは男女共同参画先進国である。彼女は日本語も堪能であるが、より正確さを期するため、今回は英語で、かつ美しいノルウェーの風景とともに話された。

ノルウェーは男女共同参画先進国であるが、その歴史は意外に新しく、1990 年代後半に、政府の政策のもと男女共同参画法案が設定された。その法案により、減少傾向であった出生率が徐々に改善され、先進国にも関わらず出生率増加傾向にある。講演タイトルである“sex-free workplaces”はまさに、職業に男女の差がないことを意味している。ノルウェーでは家族や個人の生活の充実や満足度を最も重視する人が多く、人生において価値観が非常に異なっており、その結果、男性の育児時間の長さ、子供と自然で遊ぶ時間などの長さなどが顕著となっている。こうした背景が男女共同参画の実現しやすさにつながっている。

おわりに

フォーラム前日の台風で首都圏、新幹線などの交通網がマヒした関係で、会場に来られない方もあって心配しておりましたが、最終的に 100 名弱の方に来ていただきました。オーガナイザーメンバー、演者もフォーラム前日に京都に入ることができず、当日に新幹線に 3 時間立って来られたなどご苦勞をおかけいたしました。

男女共同参画フォーラムで外国人の方にお話しいただいたのは初めてでしたが、違った側面からのご発表であり、新鮮でかつ有意義なものであったと思っています。

演者発表後の質疑討論では、これから PI を目指す若手女性研究者から、女性研究者としての外国における位置づけ等実質的な質問がありました。また、年配男性教員からは、女性研究指導者の資質に関する比較的冷たい意見もあり、それに対する反論等の意見交換がなされました。私の個人的な意見としては、昨今の大学等のハラスメント問題にみるように、男女を問わず必ず特殊な方はおられ、男性だから女性だからと一般化できるものではないと思っています。また、それを意識しなくなった時に初めて、男女共同参画の土台

が構築されたものと考えています。

今回のフォーラムを通じて、男女共同参画先進国といっても、決して歴史が古いものではなく、日本においても今後の政府の取組などに期待したいと思います。

文責：有賀寛芳

Katarzyna Inoue さん



Beatrix Fife さん

